

平成 12 年度企画展

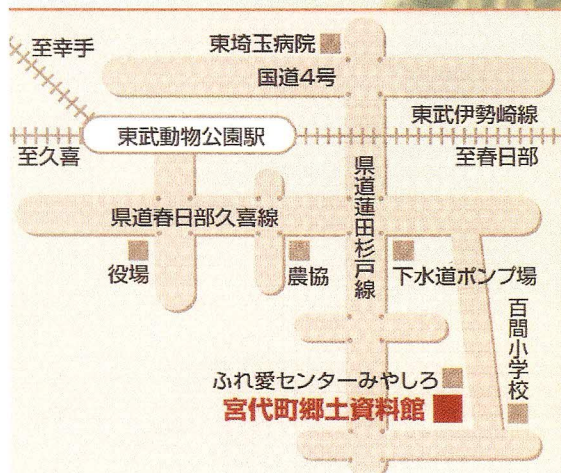
神々とのつながり

～社寺総合調査報告展～

4 / 13



6 / 12



宮代町郷土資料館

南埼玉郡宮代町字西原 289

0480-34-8882

開催にあたって

平成2年度から始まり平成11年度をもって終了した町史編さんの一環で実施された社寺総合調査は、町内の数多くの社寺や祠の1つ1つを丹念に調査しました。あわせて町内のいたるところに散在する路傍や記念碑等の調査も隅々まで行われました。これにより宮代町の貴重な文化財の全容を明らかにする手がかりとなり、町の歴史を紐解く一端としてかなりの成果となりました。これらの成果は町史資料集「社寺総合調査Ⅰ～Ⅴ・路傍調査」の5冊にまとめられ様々な分野で基礎資料として活用されています。

本企画展は、この基礎資料をもとに様々な種類の石造仏についての名称や意味等をはじめ社寺等への奉納物の種類など、特に資料集の中では解説されていない部分などを中心に総合的に内容の説明をする展示内容の構成といたしました。これによって、調査で得た成果をより広く理解し活用してもらえればと思います。

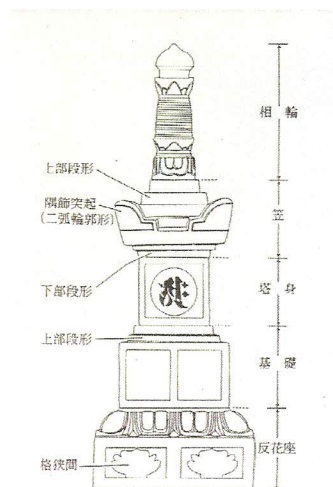
最後になりましたが、企画展示開催にあたり快く資料をご提供いただきました皆様並びにご指導、ご協力いただきました関係各位に心より感謝申し上げます。

宝篋印塔とは？

宝篋印塔の名称は「宝篋印心呪経(=40の句からなる様々な功德を集めた呪)を納める塔」という意味からこの名称が生まれました。五輪塔と同じように広く普及した塔形です。

図と展示写真とでみくらべるとわかりますが、平面は各部とも四角で、下部から反花座、基礎、塔身、笠、相輪の5部分から構成されます。造立年代によって石質や隅飾突起形態等が違い特色がでています。

実物の展示資料は宝篋印塔を構成する一部分です。



真藏院宝篋印塔（江戸時代）



神外坊宝篋印塔笠（戦国時代）



青林寺宝篋印塔反花座（戦国時代）



千手観音について

千手観音は変化観音の一つで、その手で一眼ずつ千眼を持つので千手千眼観自在菩薩といわれます。また、千の慈眼と千の慈手で衆生を済度するので大悲観音ともいわれます。

この写真で紹介する真蔵院のもので確認できますが、合掌の両手を除き、左右に二十手ずつの四十手像であり、一手で二十五有界の衆生を救うために四十手で千手とするとされています。

青林寺千手観音

十一面観音について

十一面観音は昔から、子弟の無事な成長と学問成就の守りと、子育て観音として人々に信仰されてきました。町内の西方院にある十一面観音(町指定文化財)は二十五年に一度御開帳される秘仏でもあります。もとは西方院の近くにあった観音寺にありましたが、この寺が廃寺になる際にこの十一面観音はこの西方院へ移されたものです。

一般的に十一面観音の特徴は、十一面といわれるように頭部に十一の観音があることです。これは菩薩十地の修行を完成して第十一地の仏の位に到達したことを十一面で表わしています。この頭上の十一面は何かというと、菩薩面が三面、忿怒面が三面、狗牙上出面が三面、大笑面が一面、頂上に阿弥陀の化仏が一面の合計十一面を意味します。頭上以外の特長としては右手に念珠、左手に蓮華を挿した水瓶を持っています。一般的にこの仏像の功德は諸病を防ぎ、財宝を持ち、敵難、水火難から避け、虫毒や寒熱にならず、長生きをするといわれています。



西方院十一面観音 (室町時代)
宮代町指定文化財



勝軍地蔵について

勝軍地蔵は、頭に冑を戴き、身には鎧を着け、太刀を佩き、幡をなびかす姿とされています。

写真で紹介されている地蔵堂の將軍地蔵でもその姿は確認できますが、その姿には仏教的な解釈があり「頭に畢竟空寂の兜、身につける鎧は随求陀羅尼、佩く太刀は金剛智、発心修業の幡をなびかせ悪業煩惱の軍に勝つの剣を執る。また兜の天穴は日月輪、冑の量は衆生、鎧の袖は両界を現し、胸板は不動、草摺を四天王に当てる」というものです。

地蔵院勝軍地蔵 (江戸時代)

五輪塔とは？

五輪塔は現在もよく用いられ、もっとも一般的に知られている塔形です。

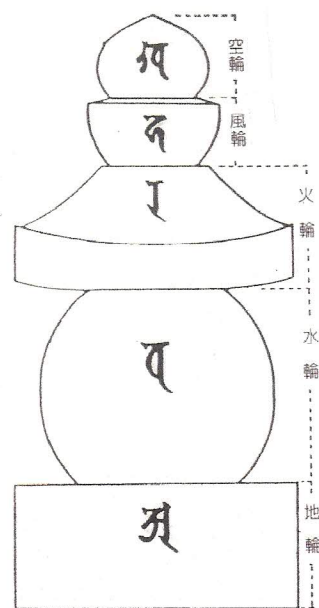
図と写真のように上部から空輪（宝珠形）、風輪（半月形）、火輪（三角）、水輪（円）、地輪（方形）と五つの部分から構成されます。



神外坊五輪塔笠（戦国時代）



青林寺五輪塔地輪（戦国時代）

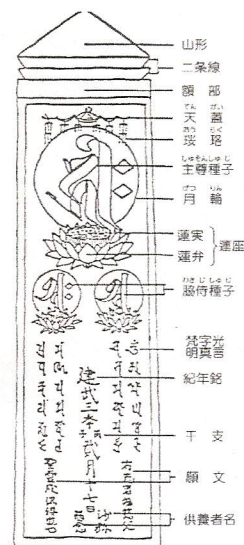


板石塔婆とは？

板石塔婆は一般的に「板碑」「青石塔婆」等と言われ、「卒塔婆」「塔婆」などと称される構築物の1つです。そして十六世紀末を最新とし「中世にはじまり、中世に終わる」と言われる中世にだけしか造られなかった板状の供養塔です。

最古の例は、埼玉県大里郡江南村の嘉禄三年（一二二七）のものです。分布状況が全国的に確認されていますが、初期のものは関東に多く、数のうえでも集中しているのが特徴です。その当時の造立者は武士階級とそれに関連する僧などとみられ、室町期になり庶民の間でも造立されました。

形態の特徴は、地方独特の特色がみられますが、埼玉県を中心に分布する武蔵形板碑は、荒川上流産の緑泥片岩（秩父青石）が用いられています。基本的に左の図のように長方形の板状で、頂部を山形とし、その下に二条の切り込みを作り、長方形の身部には種子を彫り、年号が刻まれています。



鳥居とは？

神社の参道の入口付近や社殿までの途中に必ずといってよいほどあるのがこの鳥居です。

基本的な形の名称は明神型で、左の図のように笠木、島木、円柱、額束、貫の部分からなっています。作りが簡素で、貫を柱外に出さない神明型もみられます。中には石造りのものもあります。



五社神社鳥居（江戸時代）

薬師如来について

薬師如来は薬師瑠璃光如来、大匡王仏ともいわれます。この仏様は、昔から人々に、万病を癒し、人の寿命を延ばす力があると信じられています。また、この世で様々な利益を与えてくれる如来として広く人々の信仰を集めてきました。

この仏像の一般的な特徴は、両手で薬壺を持つ姿をしているものや右手で施無畏を表わした印を結び、左手で薬壺を捧げる仕草をしている姿をしていることです。

遍照院薬師如来



阿弥陀如来像について

阿弥陀如来像は様々な容姿をしています。現在でも多くの人々に信仰されている阿弥陀仏信仰は、誰もが念仏をとなえることにより極楽浄土に往生し、そして極楽往生して仏の説法を聞き不安なく過ごしたいという人々の願いをかなえるものです。

この阿弥陀像の特長は、姿の種類が様々なものがあることです。まず、相についてですが、

- ① 説法相の像（施無畏・与願印・転法輪印を結ぶ）で多くが坐像
- ② 定印相の像（大指と頭指を捻じた左右の手を胸下で合わせる、いわゆる定印を結ぶ）で立像・坐像の両方
- ③ 来迎相の像（立像が多く、極楽浄土より念仏行者を迎えにくる姿で、両脇に脇侍を従え飛雲に乗る姿をしている）



西光院阿弥陀如来（平安時代）
国指定重要文化財



長福寺聖観音

聖観音について

聖観音は数多い観音たちの原点です。十一面観音や如意輪観音など変化観音と区別するために聖観音と呼ばれます。この名称を正しくは観世音菩薩、観自在菩薩といいます。観音はすべての衆生を救済するために三十三の姿に変化するといわれ、これを三十三応身といいます。

特長は、宝冠の模様に弥陀の化仏がつけられ、左手に未敷または開敷の蓮華を持ち、右手は与願印を結ぶか蓮華に軽くそえる姿です。蓮華は慈悲のしるしを表わし、未敷は衆生の本来持っている仏性をまさに開こうとしていることを表わし、開敷は仏性が開顕して成仏したことを表わしています。

石橋供養塔について

江戸時代には人びとの通行する橋や道路、あるいは石階の建設にあたって、これが堅牢を保ち永く人びとの使用に耐えられることを祈念して供養塔を造立する習俗がありました。その中でも石橋供養塔は、木橋を石橋に架け替えたときや、損壊した石橋を新たに架け替えたときに、その完成による利便を喜び、石橋の供養を行うために建てられたものです。

特徴は、形が自然石や角柱型の塔が多く、この展示している石橋供養塔のように、正面に「石橋供養塔」の文字が彫られ、そして石橋の建設費用を醸出した人びとの名や、供養にあたった僧の名が刻まれています。

馬頭観音について

馬頭観音は、町内の路傍に数多く見られます。昔は馬が農家などで大切な労働力として飼育されていました。その馬が死んだときに供養するために建てました。町内にある多くのものは、写真で紹介している馬頭観音塔といわれる馬頭観音の仏名である「馬頭観世音」「馬頭観音」などと石塔に刻まれた供養塔です。写真のように、石造物の浮彫り像の頭上に馬の頭があるものもあります。また石像物の側面には「みちしるべ」としての文字が刻まれているものもあります。



青面金剛

青面金剛は夜叉神の名称で、多くは庚申塔の主尊として信仰されています。全国におびただしく分布しており、町内にもこの石塔はかなりあります。形態は多種多様であり地方色がみられることから石仏調査の最も興味のある対象となっているようです。

特徴として、この写真のように、この石塔に刻まれている像は、四臂三眼の忿怒像で、右手に輪宝、絹索、左に三股叉、棒を持ち、口を大きく張り、獠牙を出しています。頭髮は逆立ち、火?のごとき色をなし、髑髏、蛇を戴く。両腕、腰に蛇を巻き、虎皮の袴、却下に二鬼を踏み、台石に三猿を伴うのが一般です。ほかに、ショケラという女人を持つものや二童子を配したものもあります。

六地藏とは？

六地藏は寺院や墓地の入口付近によくみる石仏です。この六地藏には六地藏信仰という地藏が六道(=人間はこの世で行った行為の結果により、死後の世界が6種類その死後の世界のうちどれかの世界に生まれかわるという考え方)を輪廻転生し人々を救済する思想から六つの分身が生まれるという信仰です。



正福坊六地藏

石燈籠とは？

石燈籠は社寺前に置かれる石製の燈籠で、本来中心に一個置かれたものが、のちに対となりました。上から宝珠、笠、火袋、中台、竿、基礎の部分からなり、構造的に石に似ており、笠の蕨手、火袋、竿の節の有無がこの違いを示しています。

石祠とは

石祠とは石で造られた家屋形の石造物のことです。町内でも社寺や路傍、個人宅等にあるのがかなり確認されています。



若宮八幡石灯籠（江戸時代）

無縫塔とは？

無縫塔は塔身が卵形であることから卵塔とも呼ばれています。はじめは禅宗の僧侶の墓に用いられていました。これがのちに僧侶の墓として一般に用いられました。

図の右側のように上部から塔身、請花、中台、竿、基礎の部分から構成されるものは重制と呼ばれ、また図の左側のように竿の省略されたものは単制と呼ばれています。



身代神社狛犬（江戸時代）

狛犬について

狛犬は、社寺の守護役として神前に阿吽1対（阿は口を開いていて吽は口を閉じている）として置かれるものです。古くは、堂内に置かれていましたが、石造として野外におかれるようになりました。

手洗石について

手洗石は、社寺を参詣するときに身を浄めるためのものです。この石造物は鳥居と同様に神社には必ずあります。また、特徴は正面に「奉納御手洗石」など多様な銘文が彫られていたり、姫宮神社にある

手洗石のように鶴の神紋（＝各家に家紋があるように神社には神紋があります。）が彫られていたりします。



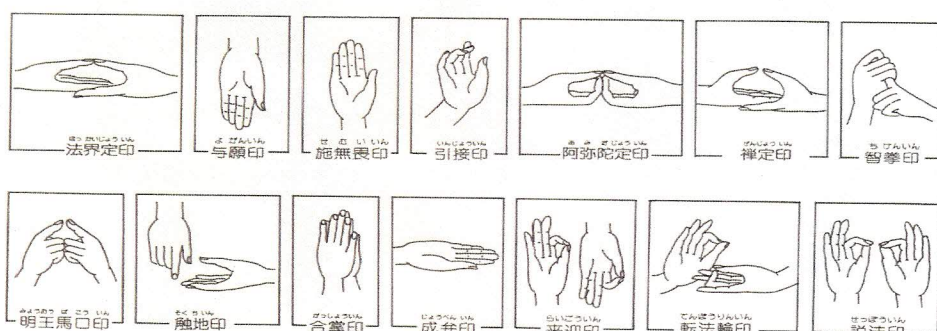
長福寺無縫塔（江戸時代）

不動明王について

不動明王は、本来、広く如来の使者として存在しました。しかし、大日如来の使者として真言行者を守護する存在となりました。化生三昧に入って一切の罪障を打破り、動揺しないところから不動といわれます。明王部の代表的な存在として、五大明王や八大明王の主尊とされています。

特徴であるその姿には、右手に宝鏡、左手に索を持つ忿怒形の一面二手像で、盤石座や瑟瑟座に座るものや岩座に立つものがあります。矜羯羅、制迦の二童子の脇侍を伴なうこともあります。

石像物の文字塔で、自然石や角柱に「不動明王」「不動尊」などと刻まれているものが一般的で、「不動明王大菩薩」「成田山不動明王」などもあります。



円空仏 (真蔵院 所蔵)

印相の種類

本町では現在まで円空仏は10体が確認されています。ほとんどは日光御成道沿いや戸地区からです。町内の円空仏は座高8～17cmと小型のものが多く、町内で最も大きなものは59cmのものです。この円空仏(真蔵院)は45.7cmと町内で確認されてきたものでは大型のものです。また、現在までに確認されてきた円空仏とはかなり違った特徴があります。



この円空仏の最も大きな特徴は、団子状に大きく横に膨らんだ鼻と下唇が半円や薄い半円状でなく入り組んでいるラインが見られることです。この特長をもった円空仏は関東地方では稀であり、岐阜県・愛知県・三重県で確認されているもので延宝年間(江戸時代後期)に造られたものに多く見られます。これよりこの円空仏は延宝年間のものと推定することができる大変貴重なものです。

協力者・団体(敬称略)

華蔵院・西方院・青林寺・真蔵院・宝生院・飯山實・林宏一・宮代町史金石部会・宮代町内の神社仏閣を管理する皆さん

展示・企画・執筆／鷲谷栄一
編集／河井伸一

平成12年度企画展

神々とのつながり

～社寺総合調査報告展～

展示解説パンフレット

発行／宮代町郷土資料館

南埼玉郡宮代町西原289

0480-34-8882

<http://www1.sphere.ne.jp/miyasiro/musiam/m1-1.html>